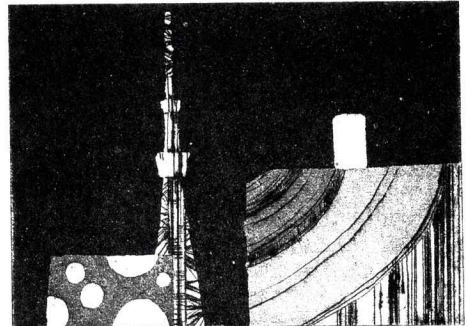


朝日 歌壇 俳壇

◆長谷川 權選

- 一竿の水音だけの花見舟 (神戸市) 高橋 寛
- 春眠のままにひと日の過ぎにけり (福岡市) 釋 蛸硯
- はくれんの空のまぶしき子大かな (浜松市) 久野 茂樹
- 孫悟空・ドラゴンボール・宇宙春 (新宮市) 中西 洋
- あれは夢これは現と大朝寝 (太田市) 吉部 修一
- 桜餅くばつて老舗閉店す (飯塚市) 古野 道子
- 福島に牛飼ひのぬし春惜しむ (福島県伊達市) 佐藤 茂
- 春泥に獣の香の残りける (静岡市) 松村 史基
- 春天に届かずロケット爆発す (東京都足立区) 無京 水彦
- 亡き夫のネクタイ選ぶ孫の春 (鎌倉市) 小林 知子

【評】一席。なんと静かな花見舟。存分に味わいたい。二席。うつらうつらと過ぎてゆく春の永い一日。人生の佳境か。三席。咲き満ちる白木蓮。子犬の心になって詠んでいる。十句目。夫から孫へ。大事にされているネクタイ、いや夫。



〈街かど 上野 I〉 岩尾恵都子

◆大串 章選

- 生老病あとは知らぬぞ葦草 (横浜市) 小田 正治
- 春の海琴に夢中の日々ありし (伊丹市) 保理江順子
- 春の星の王子の住むところ (名古屋市中区) 平田 秀
- ふるさとに繋がる空へしやばん玉 (厚木市) 北村 純一
- 葱坊主父母の形見の我や喜寿 (大村市) 小谷 一夫
- 一生の一句をいつれ山笑ふ (仙台市) 柿坂 伸子
- 里山は我も我もと木の芽吹く (長崎市) 佐々木光博
- 点滴の一滴つづの暖かさ (嘉麻市) 松井 春光
- 和紙の里一人一人に水温む (松山市) 正岡 唯真
- 早春や海の音する無人駅 (宝塚市) 吉田 賢一

【評】第1句。「あとは知らぬぞ」に共感、異議なし。慣用句「生老病死」を踏まえる。第2句。箏曲家宮城道雄の名曲「春の海」に没頭した日々、懐かしい。第3句。「星の王子」はあの星へ帰ったのだ。サンテグジュペリ作「星の王子さま」を思う。

うたをよむ 桜の季節に

桜の季節が巡ってくるの見慣れた一冊が私の手もとに置かれる。飯島晴子句集『春の蔵』である。初めて手にしたのも桜花のほころぶ頃。読み終えたその時の言い知れぬ解放感と高揚感は今なお鮮明に記憶に残る。以来二十有余年。いつしか私だけの年中行事のように繰り返されている。今年もまた、窓辺の満開の桜に誘われるように頁を開く。

春の蔵からすのはんと押しあふるひんやりと紗のかかる春の光を感じる作品群。現実の明るい春の光よりもさらに眩しく、そして仄暗い。まさに蔵の窓から差し込む春の光である。一句目で、その光は「座敷のなか」にも迷い込む。高らかに響き合う母娘らの笑い声。それも束の間、座敷の景は恐ろしく静かな空間に一変する。「春の蛇」の存在が妖しくも美しい。二句目。蔵の方に向きを変え鳴く鶯。ふと手にふれたつめたいた夕

鳥居真里子

桜。三句目。蔵の外は春爛漫の桜吹雪。幽かな光を背にして、からすのはんこを押しとは、何と不思議な光景だろう。三句ともに「瞬の光のような景だが、その実、物語にも似たたおやかな時間を秘める。それはやがて読み手だけのものとなり、愉悅のひとつが訪れる。「短くて完結する俳句という詩型は、言葉が言葉になる瞬間の不思議さについて、思いを誘うものをもっている」。晴子著『俳句発見』の一節に俳句の醍醐味を探るヒントが見える。桜と『春の蔵』と私をつなぐ良縁はまだ絶やせない。(門 圭幸・俳人)

◆高山れおな選

- いちにちのおおかた歩く春の鳩 (川崎市) 小関 新
- 春宵や重き乳房のやうに更く (大村市) 高塚 酔星
- 雪晴れの日差しを頬に出動す (東京都世田谷区) 山下 光代
- 西東忌ジュークボックスある酒場 (栃木県壬生町) あらゐひとし
- ☆日向ぼこあんな小さな雲が邪魔 (秩父市) 浅賀信太郎
- 雑炊に卵溶き入れ震るる夜 (村上市) 佐藤 直子
- 龍天に登る鳥山明連れ (倉敷市) 森川 忠信
- ☆春光や裸ん坊の赤ん坊 (廿日市市) 伊藤ほとむ
- 定宿に集ふ天狗や船談義 (加古川市) 池田 秀昌
- 人生は落第しても卒業に (筑紫野市) 二宮 正博

【評】小関さん。そう言われればそうか。コロンブスの卵的な意外性の一句。高塚さん。大胆な比喩。納得できるかできないか、読み手によって意見が分かれそう。山下さん。早朝まで降っていた雪がやみ快晴に。「日差しを頬に」が爽やか。

◆小林 貴子選

- ☆日向ぼこあんな小さな雲が邪魔 (秩父市) 浅賀信太郎
- 魚屋の水の上の桜鯛 (交野市) 遠藤 昭
- 三月の十一日の接木かな (横浜市) 岡部 豊
- この村にミモザはどうも馴染まない (竹田市) 伊藤信一郎
- 新社員語り合ふドラゴンボール (東京都足立区) 山平 由央
- 巻き方で差をつけるらし春シヨール (富士市) 村松 敦視
- 凍らない滝止まらない温暖化 (川崎市) 高畑 遠洋
- 億年の岩屏風立て芽吹山 (高松市) 信里由美子
- ☆春光や裸ん坊の赤ん坊 (廿日市市) 伊藤ほとむ
- 子ら去りて桜と風の滑り台 (三鷹市) 二瀬佐恵子

【評】一句目、太陽を隠すためにだけに生まれたような小さな雲。邪魔だがかわい。二句目、ふんだんに敷かれた氷に着目し、桜鯛の姿が一層鮮やか。三句目、3・11から十三年、あらゆる生き物が未来に向けてすくすく育ってほしいと願う。

「花巡る 黒田杏子の世界」 一周忌記念出版で、刊行委員会編。第I部は「黒田杏子のことば」で、本人の評文などを収録。第II部は「黒田杏子を偲ぶ」で、交遊のあった俳人や文化人らが寄稿。(藤原書店・3630円) 第41回兜大現代俳句新人賞 現代俳句協会主催。楠本奇蹟さん(41)の「触るる眼」(50句)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版に掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300。短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できます(週2首まで)。QRコードから。

